

## 出エジプト 1 章 1～22 節「神を恐れる者を」

私たちはこの世で生きていく中で、様々な困難を経験します。その中で神の民である私たち教会がどのように歩んだら良いかということも、聖書に教えられており、今日の箇所からも教えられます。

今日から旧約聖書の出エジプト記を開いていくことにしました。出エジプト記に記されている数々の神様の恵みのみわざを聞き、それらから学ぶ時に、私たちの信仰が整えられ、励まされます。そのような主のみことばの恵みを受け取っていただけると願います。

### 1. イスラエルの民は増えた（：1～7）

さて、出エジプト記は、ヤコブの12人の息子たちの名前からのリストから始まります。12人の息子たちからイスラエルの12部属が形成されていくこととなります。その12人のうちの11番目の息子ヨセフは、兄たちに妬まれ、憎まれて、エジプトへ行く商人に売られてしまいました。しかし、エジプトで奴隷とされたヨセフと主が共にいてくださり、ヨセフはファラオに特別に用いられて、エジプト全土を治める者になりました。飢饉の中でもヨセフの政策によってエジプトは守られました。そして、飢饉の中で、食糧を求めてカナンの地からやって来た兄たちとヨセフは再会し、和解することができ、ヤコブの一族はエジプトに移り住むことになりました。

その時のヤコブの一族の「総数は七十名であった」ということです。エジプトに移り住んだ時は、一つの小さな一族にすぎなかったということです。

ところが、その後、イスラエルの一族は増えていきます。ヨセフと兄弟たちが亡くなり、世代が交代していきます。百年単位の長い期間が経ったということです。その期間に、イスラエル人は人数が増えていきました。7節では彼らが増えたことが強調されています。その意味の4つの動詞が使われています。「多くの子を生んで」、「群れ広がり」、「増えて」、「満ちた」。一つの一族から増えて、一つの民族となったと言えるでしょう。非常に増えたことが強調されています。

これは神様の祝福でした。7節に使われている4つの動詞の内、3つが創世記1章28節でも使われています。「生めよ。増えよ。地に満ちよ」が同じことばです。そして、そのことが神様の祝福であることが語られています。ですから、出エジプト記に戻って、エジプトの地でイスラエル人が増えていったことも神様の祝福であったと分かります。

今も私たち神の民が増えていくことも神様の祝福です。私たち教会を神様は祝福していただきます。もちろん、増えていなくても、神様の祝福はあります。主はキリスト者一人ひとりと共にいてくださり、祝福していただきます。そして、主の祝福をいただいているキリスト者たちの群れ、教会を、神様は祝福していただきます。それは決して困難に遭わないということではないでしょう。しかし、主はご自身の教会にご臨在くださり、最善に導き、祝福していただきます。主の恵みとまことに信頼していきたいと思います。

### 2. 苦しめられた（：8～14）

ヤコブの一族がエジプトに移住した当初は、ヨセフのエジプトでの功績によって、一族は優遇されていました。けれども、100年、200年と時が経てば、状況は変わって来ます。古代エジプトの歴史によると、王朝が何度か変わっているということです。「ヨセフのことを知らない新しい王」というのも、別の王朝になったということだったのかもしれませんが。そして、イスラエルの民の数が増えたということが、エジプトの支配者や人々の脅威となっていきました。イスラエルが増えたことは神様の祝福だったのですが、その結果、エジプト人にとっては恐れとなっていきました。

そこで、エジプトの王ファラオが採った手立ては、イスラエル人に重い労役を負わせて、彼らを苦しめることでした。彼らの上に役務の監督を立て、「倉庫の町ピトムとラメセス」の建設工事で働かせたのでしょう。ファラオは、重い労役で苦しめれば、イスラエルの民は弱くなるだろうと考えたのでしょう。しかし、そうではありませんでした。

12節。このことも、イスラエル人が頑強で、精力的だったということよりも、神様の守りと

祝福があったということを表しているのでしょう。

けれども、ますます増え広がるのを見ると、エジプト人は恐れを抱きます。そして、ますます過酷な労働を課していきます。

私たちは今、当時のイスラエルの民のような状況ではありません。でも、私たちも様々な形で重荷を負わせられる状況は起こってくるでしょう。しかし、一つ言えることは、困難な時だからこそ、私たち教会は真剣に神様に祈るということです。イスラエルの民も、激しい過酷な労働を課せられ、苦しむ中で、イスラエルの神、主に叫び求めたのです。そして、やがて、主がその中から救い出してくださるのです。

### 3. 助産婦たちは神を恐れた（：15～22）

さて、エジプトの王は、イスラエルの民に過酷な労働を課すだけで満足せず、ヘブル人の助産婦たちを呼び出し、残忍な命令を出します。赤ちゃんが生まれる時、男の子だったら殺しなさいというのです。なんとということでしょうか。しかし、助産婦たちは王の命令に従いませんでした。

17～19 節。ここを読む時に、彼女たちの信仰に励まされます。助産婦たちは、まことの神様を信じるイスラエル人の中でも特に、いのちの誕生に関わっていたからでしょうか、人の力を超えた、いのちをも支配される神様の御業を身近に感じて、神様を恐れていたのでしょうか。人が人のいのちを奪うことは、いのちを与えた神様に対する罪であることを認めていたのでしょうか。それで、王の命令には従いませんでした。

助産婦たちが王の命令に従わないことは危険なことだったでしょう。命がけのことだったでしょう。しかし、彼女たちにとっては、目に見えるエジプトの支配者よりも、目に見えない天地万物の創造主にして支配者である神様こそ恐れるべきお方でした。目には見えませんが、信仰の目で神様を見上げるときに、神様に従う行動となるのです。

そして、彼女たちの行動が主に喜ばれたことは、その後の記述で分かります。20～21 節。神様はこの助産婦たちの信仰に応えてくださいました。彼女たちに良くしてくださいました。王に罰せられることなく、彼女たちの家は栄えることになりました。それが神様の祝福であったと聖書は記しています。

エジプトの王よりも神様を恐れたこの助産婦たちの信仰に、私たちも倣う必要があります。この世において、立てられた権威に基づいて、私たちに要求したり、命令したりしてることがあるでしょう。ローマ書にあるように、「人はみな、上に立つ権威に従うべきです」と教えられています。社会においてなすべきことがあります。しかし、その要求や命令が、神の教えに従うことを妨げるものであるなら、キリスト者は「人に従うより、神に従うべきです」。人を恐れず、神様を恐れるべきです。そうする時に、一時的には人の怒りを招くことがあったとしても、やがては神様の素晴らしい祝福にあずかることになるのです。

今日は出エジプト記 1 章から私たちは大切なことを教えられました。神を恐れることです。

私たち教会、神の民が、主の素晴らしい御業を経験する前に、苦しみを受けることがあるということです。そして、苦しみが大きいほど、私たちは訓練され、そのことを通して受ける主の恵みも大きいのです。

今まさにウィルス感染という試練によって、社会は、そして私たち教会も試みられています。しかし、この困難の中で、私たちは主に祈りましょう。真剣に祈りに向かわせられている恵みがあります。

また、その中で、主を恐れる信仰とその信仰に立って行動することができるように祈りましょう。主はご自身を恐れる者たちに良くしてくださるのです。